
[成果情報名] イチゴ「あまおう」の高設栽培における省力的施肥技術

[要約] イチゴ「あまおう」の高設栽培において、溶出タイプの異なる肥効調節型肥料を配合した基肥用肥料を株当たり窒素量で 3.5g 施用し、定植後 1 ヶ月間に液肥を株当たり窒素量で 0.5g 施用する体系は、液肥施用体系と同等の生育および商品果収量が得られる。

[キーワード] あまおう、イチゴ、高設栽培、肥効調節型肥料

[担当部署] 野菜栽培部・イチゴ栽培チーム

[連絡先] 092-922-4364

[対象作物] 野菜

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

福岡県のイチゴ高設栽培では、施肥窒素量の約 4 割を緩効性肥料により基肥として、その後は生育に応じて液肥を施用している。しかし、この施肥体系では、施肥回数が多く、生産者の施肥管理が煩雑となりがちである。そこで、高設栽培の「あまおう」について肥効調節型肥料を用いて、施肥窒素量の 9 割程度を基肥として施用することを基本に、初期生育が安定するために液肥施用を加えた省力的な施肥技術を確立する。

(要望機関：筑後農林 (H16))

[成果の内容・特徴]

- 1 . イチゴ「あまおう」の生育には、ロング 424-140 日タイプ、スーパーロング 424-140 日タイプ、LPSS100、LPS120、重焼リン、硫加コートを配合した肥効調節型肥料 (配合割合はそれぞれ 27.5:16.5:19:6:16:15、N-P₂O₅-K₂O で 16 % -12 % -12 %) が適する。この肥料の窒素溶出は施用後 45 日間はやや少く、以降はほぼ一定となる。
- 2 . 土壌溶液の pH は、株あたり窒素成分で基肥 3.5 ~ 4.5g、定植後 1 ヶ月間に液肥 0.5g 施用する体系が液肥体系よりやや低く、栽培期間を通して安定する。また、硝酸態窒素濃度は液肥体系と比べて変動が小さい (図 1)。
- 3 . この施肥体系における草高は、液肥体系と同等である。また、頂花房開花日は液肥体系よりやや早い、第一次腋花房の開花日はやや遅くなる (図 2、一部データ略)。
- 4 . この施肥体系における商品果収量は、液肥体系より年内では多い傾向にあるが、全期間を通すと同等である。(表 1)
- 5 . この施肥体系により、施肥管理を行う期間が約 8 ヶ月間から 1 ヶ月間に短縮される。

[成果の活用面・留意点]

- 1 . イチゴ「あまおう」の高設栽培技術として活用できる。
- 2 . 培養土に小型ポット用いちご専用培土と作と粉碎杉皮の混合物 (容積比 1 : 1) を株当たり 2.5 L 使用した試験結果である。
- 3 . 温湯を循環し、培地温度を 15 ℃ に制御した。

[具体的データ]

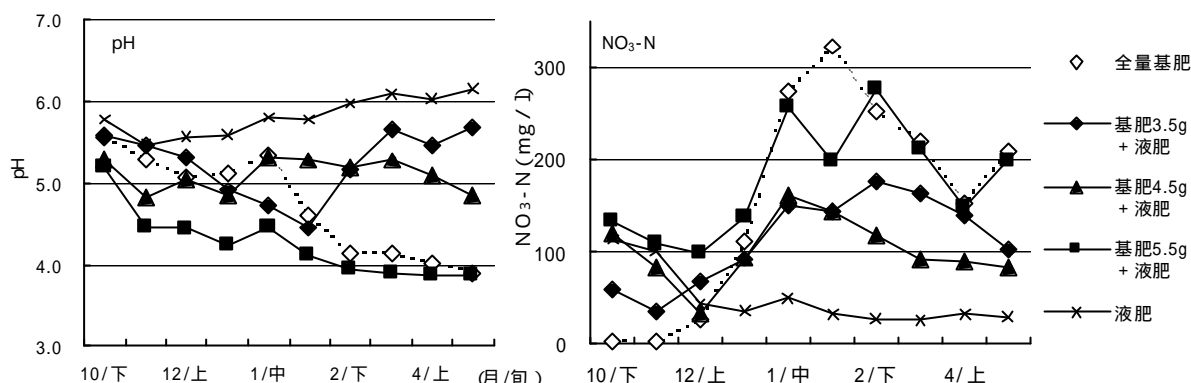


図1 施肥方法による土壌溶液のpHとNO₃-Nの推移(平成17年度)

- 注) 1.全量基肥区は基肥用肥料を窒素量で3.5g/株施用、以下同じ
 2.基肥用肥料を施用した3区は定植後1ヶ月間にOK-F-1 2000倍液を窒素量0.5g/株施用、以下同じ
 3.液肥区は、OK-F-12000倍液によるかん水同時施肥(窒素投入量実績2.7g/株)、以下同じ
 4.NO₃-NはRQ-Frexで測定

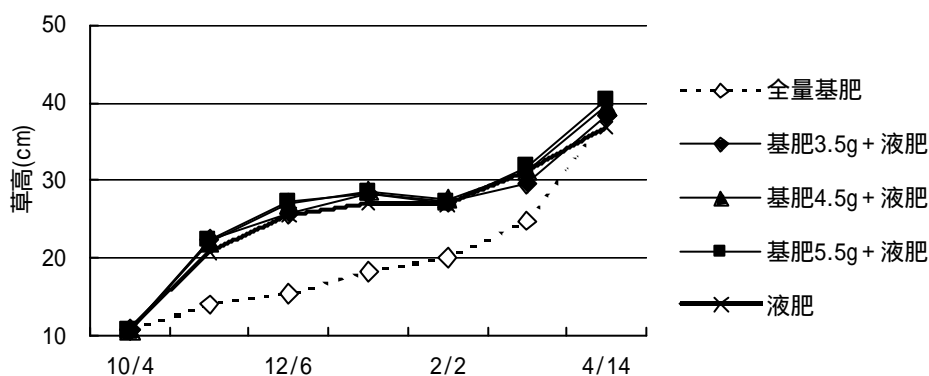


図2 施肥方法による草高の推移(平成17年度)

注) 定植日は9月21日、以下同じ

表1 施肥方法による時期別商品果収量の推移(単位 kg/10a)(平成17年度)

	12月	1月	2月	3月	4月	合計
全量基肥	270 a	919 a	202 b	878 a	596 a	2,865 (77) a
基肥3.5g+液肥	545 c	1,274 b	56 a	513 a	1,176 b	3,564 (95) b
基肥4.5g+液肥	588 c	1,180 ab	80 a	506 a	1,450 b	3,804 (102) b
基肥5.5g+液肥	502 bc	1,110 ab	104 ab	660 a	1,305 b	3,681 (98) b
液肥	353 ab	1,285 b	97 a	611 a	1,394 b	3,738 b

注) 1.()は液肥区を100とした比率(%)

1.Tukey検定により異なる文字間には5%水準で有意差あり

[その他]

研究課題名: 促成栽培における高設栽培の安定多収技術の確立

予算区分: 経常

研究期間: 平成17年度(平成14~17年)

研究担当者: 佐藤公洋、北島伸之